

勝海舟基金

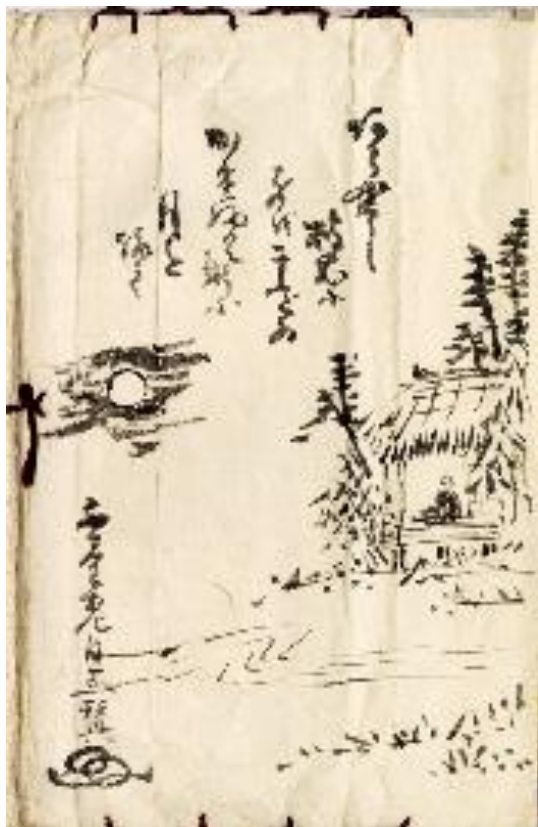
- 活用報告 -

あたたかいご支援を
ありがとうございます

平成30年8月から募集し、
令和2年度末には累計で、806件47,364,964円のご寄附を賜っております。
ご支援いただきました寄附の一部を次のとおり活用致しましたので
ご報告申し上げます。

■資料の購入

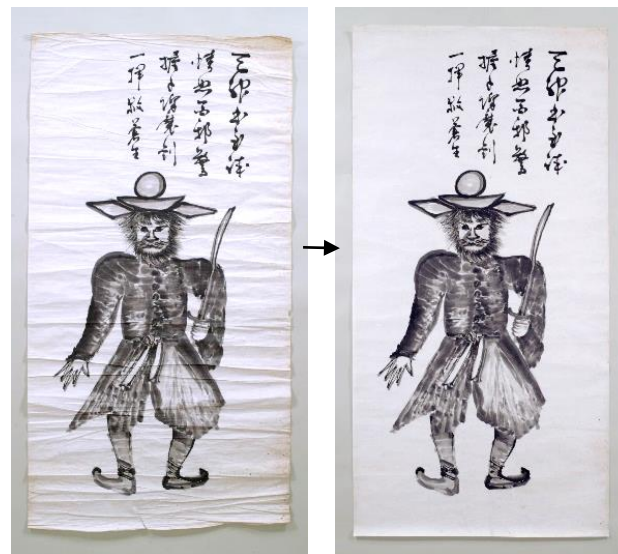
令和2年度には、みなさまからのご寄附を活用させていただき、
勝海舟ゆかりの資料206点を購入いたしました。
今回購入した資料の一部は、開館2周年記念展で展示予定でございます。
ここでは、勝海舟の父として知られる勝小吉の自筆資料を紹介します。



◁ 勝小吉(不量老)自画賛(初公開)
小吉(左衛門太郎惟寅、夢酔)は、勘定組頭を務めた旗本・男谷忠恕(平蔵)の3男で、7~8歳の時に勘定所の下級役人であった勝家の末期養子に迎えられました。しかし、旗本としての立身には挫折し、以後、徳川家齊治世下の江戸にあって町人との交わりを深めています。その天衣無縫な言動に彩られた半生は、天保の改革で罰せられた小吉自らが、反省と子孫への訓戒とを込めて著した『夢酔独言』からよく知られてきました。
従来、小吉の自著は、天保14(1843)年に記された『夢酔独言』など僅か数点が知られるのみでした。よって、嘉永3(1850)年に死去するまでの動静については明らかではありませんでしたが、今回、最晩年の小吉の日記類やその他資料数点の存在が初めて確認され、「鶯谷庵」での余生の様子が明らかとなりました。中には、息子麟太郎(海舟)が幕府に提出した小吉の剃髮願や、鶯谷庵に一人佇む小吉の自画賛も含まれます。特に自画賛は、これまで肖像画等が一切確認されてこなかった小吉の姿を伝える唯一の資料です。小吉の没後170年を迎えた令和2年度、これらの資料を収集し、令和3年春の企画展「小吉ー勝海舟を育んだ父ー」で初公開しました。(学芸員：星川)

■資料の修復

収蔵資料の多くは、江戸時代末期から明治時代のものであり、中には劣化の激しいものもあります。朽ちて弱くなった部分から劣化が進行するため、歴史的な資料を後世に残していくために資料の修復は不可欠です。
それらの重要な資料の修復に、みなさまからご支援いただいた寄附の一部を活用させていただき、令和2年度には、33点の資料を修復いたしました。



※本資料は7月2日から9月12日まで開催の企画展「所用品から見る海舟の姿」で展示中

◁ 修復の一例：「天神画賛」
明治時代、勝海舟が書いた画賛付きの墨絵です。画賛とは、絵の余白に書かれた文章のことで、本資料には上の方に漢詩が書かれています。
「天神本至誠 憤怒百邪驚 手握降魔劍 一揮蒼生救」と五言絶句が書かれた本資料は、『海舟座談』に海舟の「不動の詩」として取り上げられています。賛の下には降魔の剣を持った天神(不動明王カ)の姿が描かれています。海舟の書はよく知られますが、本資料は絵が描かれた資料として注目されます。

本資料は、当初全体的に強いシワと、破れや亀裂、湿気による茶色い汚損やカビ痕が多く見られました。また、紙が弱っている為、細く巻いてしまうと今後損傷が進行する可能性があるため、修復を行いました。
修復内容は、本紙に負担をかけない範囲で、汚れの除去と皺の緩和、亀裂、欠損箇所部分的な補修を行いました。最後に中性紙の紙管に巻き、中性紙の箱に収納しました。
この修復を行ったことにより、修復前は縦132.0cm×横68.3cmであったものが、修復後は縦138.1cm×横69.1cmとなり、数値からもシワが伸びたことがよくわかります。(学芸員：稲垣)

より魅力的な記念館として運営し続けられるよう、勝海舟基金は現在も募集中です。
引き続きのご支援・ご協力のほど心よりお願い申し上げます。

勝海舟基金
の詳細は
こちら



大田区立勝海舟記念館
大田区南千束2-3-1
03-6425-7608